

衛生管理者免許試験 公表問題

労働衛生（有害業務に係るもの以外）

- ① 温熱条件
- ② 視環境
- ③ 必要換気量
- ④ 快適職場
- ⑤ 労働安全衛生マネジメントシステム
- ⑥ 腰痛予防対策
- ⑦ 受動喫煙防止のガイドライン
- ⑧ 食中毒
- ⑨ 感染症
- ⑩ 情報機器作業
- ⑪ 労働衛生対策
- ⑫ 健康保持増進
- ⑬ メンタルヘルス対策
- ⑭ エイジフレンドリー
- ⑮ 健康診断の検査項目
- ⑯ 労働衛生管理統計
- ⑰ 脳血管障害・虚血性心疾患
- ⑱ 一次救命処置
- ⑲ 出血・止血法
- ⑳ 熱傷
- ㉑ 骨折

【令和 6 年 10 月】

【問 4 0】 出血及び止血法に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 体内の全血液量は、体重の約 8% で、その約 3 分の 1 を短時間に失うと生命が危険な状態となる。
- (2) 静脈性出血は、擦り傷のときにみられ、傷口から少しずつにじみ出るような出血である。
- (3) 止血を行うときは、受傷者の血液による処置者への感染防止のため、ビニール手袋を着用したりビニール袋を活用するようにする。
- (4) 止血法には、直接圧迫法、間接圧迫法などがあるが、一般人が行う応急手当としては直接圧迫法が推奨されている。
- (5) 間接圧迫法は、出血部位より心臓に近い部位の動脈を圧迫する方法で、止血点を指で骨に向けて強く圧迫する。

▶▶ 解説 ◀◀

- (1) (3) (4) (5) 正しい
- (2) **誤り**：「静脈性出血」⇒「毛細血管性出血」。静脈性出血は、浅い切り傷にみられ、傷口からゆっくり、とぎれることなくあふれるような出血である。

* 解答 * (2)

【令和 3 年 10 月】

【問 3 6】 出血及び止血法並びにその救急処置に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 体内の全血液量は、体重の約 13 分の 1 で、その約 3 分の 1 を短時間に失うと生命が危険な状態となる。
- (2) 傷口が泥で汚れているときは、手際良く水道水で洗い流す。
- (3) 止血法には、直接圧迫法、間接圧迫法などがあるが、一般人が行う応急手当としては直接圧迫法が推奨されている。
- (4) 静脈性出血は、擦り傷のときにみられ、傷口から少しずつにじみ出るような出血である。
- (5) 止血帯を施した後、受傷者を医師に引き継ぐまでに 30 分以上かかる場合には、止血帯を施してから 30 分ごとに 1～2 分間、出血部から血液がにじんでくる程度まで結び目をゆるめる。

▶▶ 解説 ◀◀

- (1) (2) (3) (5) 正しい
- (4) **誤り**：「擦り傷のときにみられ、傷口から少しずつにじみ出るような」⇒「浅い切り傷のときにみられ、傷口からゆっくりと湧き出るような」。選択肢は、毛細血管性出血の内容。

* 解答 * (4)

【令和3年4月】

【問37】 出血及び止血法並びにその救急処置に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 体内の全血液量は、体重の約13分の1で、その約3分の1を短時間に失うと生命が危険な状態となる。
- (2) 傷口が泥で汚れているときは、手際良く水道水で洗い流す。
- (3) 止血法には、直接圧迫法、間接圧迫法などがあるが、一般人が行う応急手当としては直接圧迫法が推奨されている。
- (4) 毛細血管性出血は、浅い切り傷のときにみられ、傷口からゆっくり持続的に湧き出るような出血である。
- (5) 止血帯を施した後、受傷者を医師に引き継ぐまでに30分以上かかる場合には、止血帯を施してから30分ごとに1～2分間、出血部から血液がにじんでくる程度まで結び目をゆるめる。

▶▶解説◀◀

- (1) (2) (3) (5) 正しい
- (4) **誤り**：設問は「静脈性出血」の説明。毛細血管性出血は、擦り傷のときにみられ、傷口から少しずつにじみ出るような出血である。

解答 (4)

【令和2年10月】

【問40】 出血及び止血法に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 体内の全血液量は、体重の13分の1程度で、その約3分の1を短時間に失うと生命が危険な状態となる。
- (2) 動脈性出血は、鮮紅色を呈する拍動性の出血で、出血量が多いため、早急に、細いゴムひもなどを止血帯として用いて止血する。
- (3) 静脈性出血は、傷口からゆっくり持続的に湧き出るような出血で、通常、直接圧迫法で止血する。
- (4) 内出血は、胸腔、腹腔などの体腔内や皮下などの軟部組織への出血で、血液が体外に流出しないものである。
- (5) 間接圧迫法は、出血部位より心臓に近い部位の動脈を圧迫する方法で、それぞれの部位の止血点を指で骨に向けて強く圧迫するのがコツである。

▶▶解説◀◀

- (1) (3) (4) (5) 正しい
- (2) **誤り**：「細いゴムひもなどを」⇒「3 cm以上の幅のある帯を」

解答 (2)

【令和元年 10 月】

【問 3 7】 出血及び止血法並びにその救急処置に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 体内の全血液量は、体重の約 8 %で、その約 3 分の 1 を短時間に失うと生命が危険な状態となる。
- (2) 止血法には、直接圧迫法、間接圧迫法などがあるが、一般人が行う応急手当としては直接圧迫法が推奨されている。
- (3) 静脈性出血は、傷口からゆっくり持続的に湧き出るような出血で、通常、直接圧迫法で止血する。
- (4) 止血帯を施した後、受傷者を医師に引き継ぐまでに 1 時間以上かかる場合には、止血帯を施してから 1 時間ごとに 1 ～ 2 分間、出血部から血液がにじんできくる程度まで結び目をゆるめる。
- (5) 傷口が泥で汚れているときは、手際良く水道水で洗い流す。

▶▶解説◀◀

(1) (2) (3) (5) 正しい

(4) **誤り**：止血帯を施した場合、医師に引き継げず 30 分以上続けるときは、30 分ごとに出血点から血液がにじむ程度に 1 ～ 2 分結び目をゆるめる。

* 解答 * (4)

【平成 31 年 4 月】

【問 3 8】 出血及び止血法に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 体内の全血液量は、体重の約 8 %で、その約 3 分の 1 を短時間に失うと生命が危険な状態となる。
- (2) 止血法には、直接圧迫法、間接圧迫法などがあるが、一般人が行う応急手当としては直接圧迫法が推奨されている。
- (3) 静脈性出血は、傷口からゆっくり持続的に湧き出るような出血で、通常、直接圧迫法で止血する。
- (4) 止血帯を施した後、受傷者を医師に引き継ぐまでに 1 時間以上かかる場合には、止血帯を施してから 1 時間ごとに 1 ～ 2 分間、出血部から血液がにじんできくる程度まで結び目をゆるめる。
- (5) 止血を行うときは、処置者の感染防止のため、ビニール手袋を着用したりビニール袋を活用したりして、受傷者の血液に直接触れないようにする。

▶▶解説◀◀

(1) (2) (3) (5) 正しい

(4) 誤り：「1時間ごとに」⇒「30分ごとに」

解答 (4)

【平成30年4月】

【問38】 出血及び止血法並びにその救急処置に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 体内の全血液量は、体重の約8%で、その約3分の1を短時間に失うと生命が危険な状態となる。
- (2) 止血法には、直接圧迫法、間接圧迫法などがあるが、応急手当としては直接圧迫法が推奨されている。
- (3) 静脈性出血は、傷口からゆっくり持続的に湧き出るような出血で、通常、直接圧迫法で止血する。
- (4) 止血帯を施した後、受傷者を医師に引き継ぐまでに1時間以上かかる場合には、止血帯を施してから1時間ごとに1～2分間、出血部から血液がにじんでくる程度まで結び目をゆるめる。
- (5) 止血を行うときは、受傷者の血液による処置者への感染防止のため、ビニール手袋を着用したりビニール袋を活用するようにする。

▶▶解説◀◀

(1) (2) (3) (5) 正しい

(4) 誤り：「止血帯を施してから1時間ごと」⇒「止血帯を施してから30分ごと」

解答 (4)